

研究室紹介

千葉大学大学院 医学研究院産婦人科学 生殖内分泌研究室

千葉大学大学院医学研究院産婦人科学



教授 甲賀かをり

当教室は150年の歴史があり、甲賀は10代目の教授です。当科は歴史的には婦人科腫瘍学の研究が盛んで、婦人科がんの診断・手術に関し、日本をリードする研究が行われてきました。なかでも絨毛性疾患については、全国で屈指の患者数を誇り、高い治療成績と優れた研究業績を挙げてきています。一方、周産期医学の分野においても、千葉県の「最後の砦」として、多くの合併症妊娠・重症症例の受け入れを行い、周産期搬送ネットワークの中心的役割も果たしてきています。

産婦人科学のサブスペシャリティーの中で、残念ながら最も従事する医師数も少なく、研究業績も多くないのが、生殖内分泌学といえましょう。しかし当科では、生水真紀夫前教授も生殖内分泌学を専門としており、継続的に研究成果を挙げてきました。もとより、臨床現場では「産科」「婦人科腫瘍」「不妊症」「内分泌疾患」に別れ診療が行われているものの、研究では、「生殖内分泌学」はどの分野にも密接に関わる重要な学問です。実際、婦人科腫瘍の分野でも、ホルモン産生腫瘍の診断や、子宮体がんに対するプロゲステロン療法の研究などが行われてきましたし、周産期医学でも、胎盤でのアロマターゼなど各種ホルモン転換酵素の機能に関する研究、母体の甲状腺機能が胎児に与える影響など、内分泌に関する研究成果・症例報告を発表してまいりました。

2023年の甲賀の着任以降は、さらに下記のような臨床・研究を、医師・胚培養士・臨床検査技師・看護師など多職種が連携して行っています。

●子宮体がんに対するMPA(メドロキシプロゲステロン)療法の効果と分子遺伝学的分類の関連に関する研究
子宮体がんに対して、最近提唱された新規分子遺伝学的分類と、MPA療法後の再発率や妊娠率の関連を調べています。

●抗核抗体が異常受精をきたす機序に関する研究
抗セントロメア抗体などの抗核抗体を有する自己免疫疾患の女性が異常受精をきたして不妊となる機序の解明を試みています。

●妊娠糖尿病に関する研究
妊娠中の糖負荷試験や持続血糖モニタリングの結果による、妊娠糖尿病や関連疾患、分娩後の妊娠病発症等の予後予測を試みています。

●子宮筋腫におけるフマル酸ヒドラターゼの変異解析
クエン酸回路上の酵素であるフマル酸ヒドラターゼ



千葉大学医学部正面玄関前

左から後藤優希、馬場七織、齋藤佳子、岡田悠那、百武沙綾、石川博士

は、ATP 産生に必須の酵素で、これをコードする FH 遺伝子は腫瘍抑制遺伝子としても知られています。子宮筋腫において、この FH 遺伝子の変異解析を行っています。

●がん生殖医療

千葉県から委託を受け、千葉県がん・生殖医療相談支援センターとして、胚・卵子凍結はもちろん、がんサバイバーに対する妊孕性温存療法のカウンセリングを行っています。一般市民に向けた公開講座なども行っています。



国際生殖学会2025 ポスター発表にて
前列左から佐藤明日香、齋藤佳子、甲賀かをり、
後列左から宮下真理子、石川博士、岡田悠那、後藤優希

●移行期医療

小児疾患の成人期への移行期医療の充実を目指し、小児科・小児外科・千葉県こども病院などと連携し、新しい診療体制の構築を行っています。

最後に当科では2026年秋に「生殖免疫学会」、2027年夏に「ホルモンとがん研究会」を主催する予定です。みなさま奮ってご参加くださいますよう、よろしくお願いいたします。



千葉県がん・生殖ネットワーク県民公開講座2023年
がん専門治療医・泌尿科医・認定看護師・患者支援センター・千葉県スタッフなどと共に